坂井市の伝説と昔話（二）　―語れるものに―

杤谷　洋子

はじめに

私は現代の語り手のひとりである。私の昔話の師である小澤俊夫先生[1]は、私のように、文献の中から語るべきお話の種をみつけ文字で表記されたものをおぼえて語る者を「現代の語り手」といっている。一方、子どものころに耳からくりかえし昔話を聞き音としてよみがえる記憶から語っている語り手を「伝承の語り手」といっている。福井においてはもうずっと以前からこの「伝承の語り手」はいないといわれてきた。現代のおとなはほとんどが、子どものころ、祖父母から毎晩耳で聞いてきた経験がない。昔話といえば、本で読んで（黙読して）知る話に他ならなく、従って、耳で聞かれてきた昔話本来のシンプルでクリヤーな文体ということ自体を知らない。そういうおとなが昔話を、著者として、あるいは編集者として、本で読まれるお話に仕上げるので、昔話らしくない、描写的な、あるいは感情移入的な文体にしてしまうことが多い。

私は、小澤俊夫先生の「語り手はみな再話者である」ということばに共感し、長年小澤俊夫先生の指導のもとふくい昔ばなし大学再話研究会で勉強してきたことをいかして、先輩たちがのこしてくれた福井の伝説や昔話のかけらを集め、語り手がことばで語り聞き手が耳でことばを聞いてイメージをひろげておはなしが楽しめるものに再話し語っている。

昔話本来の形を壊さないで次の世代に伝えていくためでもある。今回は、坂井市の伝説と昔話から丸岡町の伝説・昔話「弥六岩」「毒消しの松」「松屋のびんつけ」の三話をそれぞれ①参考にした原話②共通語（標準語）に再話したもの③私の土地ことば（福井弁）に再話したものを報告する。

このうち、③土地言葉（福井弁）の再話は、二〇一六年坂井市の広報番組『坂井さんちのこっしぇるじぇ』（ケーブルテレビ）の『坂

井さんちのちょっと昔の話』の中で放映されたものを一部みなおしたものである。二〇一八年一一月現在ユーチューブで映像とともにきくことができる。

一　丸岡町の伝説と昔話

その1　弥六岩

①原話

出典『越前丸岡の民話と伝説』彌六岩（下久米田）
岩崎新之助編、築城四百年記念祭実行委員会、
一九七五年三月1版・平成四年三月4版

昔、下久米田に彌六という世にもまれな力持ちがおりました。新江の橋が時々いたんで村の人が困っているのを見て、彌六は石橋をかけようと思いつきました。

ある日、二里もある山奥に出かけていって、大岩をかついで来ました。長さは八尺もある大岩で、かついでくる途中、木の枝を折って背中当にしました。後に束にすると八束の柴ができたということです。こうして彌六のおかげで村はずれに立派な橋ができました。

彌六は、このように怪力を持っていたので村中から恐れられていました。何か気にくわぬことがあるとすぐ大木を切り倒して暴れ出しました。そこで村人たちは、がんどや鉈を持って山に入らせないようにしました。すると彌六は、「手でやるのは、かまわないだろう。」と言って、立木を片端から根こぎにして、村人を驚かせました。

下久米田ではその後、新しく橋を作ったので、石橋の大岩は高島家へ移し、今も庭園に立てられています。村人はこの岩を「彌六岩」と呼びました。

いつの頃か、金津在の千束から彌六の子孫という人が訪ねてきて、「ぜひお庭の岩を拝ませてください。」と言いました。そこで庭へとおすと、岩の前にひざまつきぽろぽろ涙を流しながら何度も拝みました。

「親の代から聞いていましたが、先祖が手にかけた岩と思うと、是非とも一度みせていただきたかったのです。」そう言って喜んで帰って行きました。

彌六の子孫は森家といい、代々大男の血筋ということです。

②共通語（標準語）

再話　杤谷洋子（二〇一六年一二月）

昔、丸岡の下久米田に弥六という男がいました。弥六はとてもおおきな大男で、それはそれは力持ちでした。

ある時、弥六は村のものと一緒になたをもって山へ木をきりにいきました。

ところが、どうしたわけか、弥六はちょっとしたことで腹をたてどうしてもがまんができなくなりました。

そこでなたをふりまわしてそばの木をぶったぎってその木をふりまわして大暴れしました。
みんなは、とてもこわいおもいをしてこまってしまいました。
それから、村の人たちは弥六と、山へ行くときはなたをもたせないようにしていました
ある時、弥六は又、村の人達と山へ木をきりにいきました。
ところが、また、ちょっとしたことで腹をたてて、どうしても、がまんができなくなりました。みんなは
「弥六は今日は、なたをもっていないから、だいじょうぶだろう」といっていました。弥六は、
「手でするのならいいだろう」といってそばの大きな木を根っこから引っこ抜くと、ふりまわして大暴れしました。
みんなは又とてもこわいめにあって困ってしまいました。
それからというもの村のみんなは、弥六をみると、いつ突然腹をたてて大暴れするのではないかと心配してこわがっていました。
ある年のこと、とてもたくさん雨がふり、村はずれの新江用水の橋がながされてしまいました。村人はみんなあつまって
「どうしたらいいだろうか」と相談していました。
すると、弥六が
「じぶんにまかせてくれ。ぞうさもないことだ。山から大岩をはこんできてじぶんが橋をかけてやろう」といいました。
そして、二里もはなれた山まで、ひとりでかけていき橋にする大岩をさがしました。

山奥でやっと長さが八尺もある大岩をみつけると、木の枝で背あてをつくり、新江用水まで運んできて橋にしました。
そのあとで、背あてにした木の枝でまきをつくったら八束もできたということです。
それからながいことたって、新江用水に新しい橋をかけることになりました。
その時この大岩は高島家に運ばれて庭石になったということです。村人たちはこの大岩を「弥六岩」とよんでいました。
今は、下久米田神社の大鳥居のそばに安置され大事にまつられているということです。
そうらい　べったり　かっちんこ。

③土地ことば（福井弁）

再話　朽谷洋子（二〇一六年一二月・二〇一七年六月二九日）

むかぁしのぉ、丸岡の下久米田に、弥六っちゅう男がいたんやとの。弥六はひどもにいけー大男で、ほれはほれは力持ちやったんやってぇの。
あっ時、弥六は、村の者（もん）と一緒に、なたもって、山へ木きりにいったんやと。
ほいたところが、弥六はどうしたんか、ちょっとしたことで、短気おこいてもて、どうにもこうにもがまんできんようね、なってもたんやっていの。

ほんで、なたで、そばのいけえ木をぶった切るっちゅうと、ほの木をふりまわいて大暴れしたんやといの。

一緒に行ったもんはひどもにおとろしいめにおうて、おうじょうこいたんやってぇの。

ほでから村のもんは、弥六と一緒に山へ木、切りに行くときは、弥六になたもたせんようね気ぃはったんやとの。

あっとき、弥六は又、村のもんと山へ木きりにいったんやぁと。ほいたところが、弥六は又ちょっとしたことで短気おこいてもて、どうにもこうにも、がまんでけんようね、なってもたんやってぃの。一緒にいったもんは、

「弥六は、きょうはぁ、なたもってえんさけんて、だいじょうぶやろ」ちゅうてたんやぁと。

弥六は

「手でしるんならいいやろぃや」ちゅうと、そばのいけぇ木を根っこからへっこぬくっちゅうとふりまわいて、大暴れしたんやってえぇの。

みんなは、また、ひどもに、おとろしいめにおうて、おうじょうこいたんやと。

ほでから、村の者は弥六をみるっちゅうと、いつなんどき短気おこいて大暴れしるかわからんと思ておとろしがってたんやってぃの。

ある年のこと、ひどもに、ようけと、雨がふって、村はずれの新江用水の橋がながされてもたんやぁと。村のもんはみーんなよって「どうしたもんかのぉ」ってはなしおうてたんやと。

ほんとき、弥六がぁ

「うらにい、まかしてんでぃま。ほんなもん、からすいこっちゃ。うらが、山からいけい岩はこんできて橋かけてやるわいや」ちゅうたんやと。

ほでから、ひとりで二里もはなれた山まであるいて行って橋にしる岩をさがいたんやとの。山奥で、長さが八尺もある大岩をみつけるっちゅうと、木の枝で背あてをこっしぇて、新江用水まではこんできて、橋にしたんやぁと。

ほのあとで、背あてにした木の枝をまきにしたところが八束もでけたんやとの。

ほでから、ながーいことたって、新江用水に新しい橋をかけることになったんやぁと。

ほんとき、大岩は、高島家にはこばれて庭石になったんやとの。

村のもんは、この大岩を「弥六岩」ってよんでたんやと。

今は、下久米田神社の大鳥居のそばに安置されて大事ぃに祭られてるっちゅうこっちゃ。

そうらい　べったり　かっちんこ

その２　毒消しの松

①原話１

出典『越前丸岡の民話と伝説』毒消しの松（谷町）

発行・築城四百年記念祭実行委員会

編集・岩崎新之助

一九七五年三月初版・平成四年三月四版

丸岡町谷の酒井正造氏宅には、福井大震災まで庭に古い松がありました。この松は〝毒消しの松〟と呼ばれていました。この松の木の周りを回ると、毒蛇にかまれた患者が不思議になおると言われ遠近から尋ねて来る者が多く、その数は一年に百人から二百人を数えるほどでした。

むかし、いつとははっきりしませんが、御油屋のご内儀さんが、縁側で髪をといていました。そこへ蛇が出て来て、

「今、自分は昇天しようとしているのですが、髪を下の方にくしけずられると、それが妨げになって昇天できません。どうかしばらくやめてくださらないでしょうか。」と、お願いするのです。お内儀さんが、

「かわいそうですから、言うとおりにしてあげましょう。」と、髪をとかすのを、やめました。すると、

「お礼に、蛇にかまれた時の毒消しを教えましょう。蛇にかまれた時、この庭の古い松の木の周りを回りなさい。痛みをたちどころに除いて毒を消してあげます。」このように、ご利やくを授けると蛇は大蛇となって昇天して行きました。

蛇にかまれた時、松の木の周りを回ると、痛みはたちどころに消えてなおりました。

それからというもの、この〝毒消しの松〟の話は次から次へと語り伝え広がって行きました。酒井家では震災後、新しい松を植え、又ほこらを建てて蛇の霊を祀りました。蛇がたばこを嫌うというので家人はたばこを吸わないということです。

原話2

出典「若狭・越前の民話」へびの約束

杉原丈夫・石崎直義共編　未来社

語り手　伊藤さだ　採集　杉原丈夫

坂井郡丸岡町谷に、御油屋（ごゆや）という油商があります。その家の庭にある松の木のまわりを回ると、へびの毒が消えますと。

むかし、その家の女の人がえん側で髪をくしけずっていると、小へびがニョロニョロと出て来ました。そして、

「今、自分は天に上ろうとしているのであるが、女の人の髪を下の方にけずられると、それが妨げになって、天に上れないから、どうぞしばらく中止してくれませんか。」といいました。それではと、いう通りに中止しますと、そのへびはたちまち大蛇になって、天に上っていきました。

喜んだへびは、そのお礼に、へびにかまれたときは、その家の松の木をまわると毒が消えるようにすると約束したのでありましたと。

②共通語（標準語）

再話　杤谷洋子（二〇一六年一月）

昔、丸岡のある家に大きな古い松の木がありました。

ある日のこと、その家のおかみさんが、縁側（えんがわ）にすわって、結っていた髪をほどき、髪をとかしはじめました。

すると、庭の松の木の下から、小さな蛇がにょろにょろとでてきました。蛇は、

「私は今、満願かなって大蛇になり天にのぼろうとしています。けれども、女の人に髪の毛を下の方にむけてとかされると、それがさまたげになって、天にのぼることができません。どうか、しばらく髪をとかすのをやめていただけないでしょうか」と言いました。おかみさんは、

「天に上れないのは気の毒だから、言うとおりにしましょう」といって髪の毛をとかすのをやめました。小さな蛇は喜んで、

「ありがとうございます。ありがとうございますお礼に、蛇にかまれた時の毒消しの方法をお教えいたします」といいました。そして

「蛇にかまれたら、この庭の古い大きな松の木のまわりをまわりなさい。痛みはすぐになくなるし毒も消えます」と教えてくれました。それから、小さな蛇はたちまち大きな大蛇の姿になると松の木から天へのぼっていきました。

あるとき、毒蛇にかまれたのでためしに、この松の木のまわりをまわってみたところ、たちまち、痛みがなくなり毒も消えてよくなりました。そこで、この松は「毒消しの松」と言われるようになり評判になりました。このうわさは遠くまでひろがり蛇にかまれたという人がおおぜいたずねてくるようになりました。

この松の木は福井大震災の時燃えて今はもうないそうです。

③土地ことば（福井弁）

再話　枥谷洋子（二〇一六年二月二六日）

むかぁしのぉ、丸岡のぉあるぅ家に、いけぇ古い松の木があったんにゃとの。

ある日ぃ、ほの家のおっかちゃんが，縁側（えんがわ）にぃねまって、結ってた髪をほどいて、とかしはじめたんやとの。

ほいたら、庭のぉ松の木の下から、ちぇえ蛇がにょろにょろってでてきたんやと。蛇はぁ、

「私はぁ、今、満願かなって大蛇になって天にぃのぼるとこですんにゃ。ほやけどた、女の人に髪の毛を下の方にむこてとかされるちゅうと、ほれがぁさまたげになって、天にぃのぼることができませんのや。どうかぁ、ちょっこしの間、たのむこっちゃで、ちびっと髪をとかすのをやめていただけませんやろか」ちゅうたんやぁと。おっかちゃんは、

「ほうけの、天にぃ、のぼられんのだ、ほりゃもつけねの。わかったさけ。ほんなぁ、言うとおりにちびっととかすのをやめるわの」ちゅうて髪の毛をとかすのをぉやめたんやと。ちぇえ蛇はぁてんこもに喜んで、

「おおきんの。おおきんの。ほなぁ、お礼にぃ、蛇にかまれた時のぉ

毒消しの方法を教えてさしあげますさけんて」ちゅうて、
「蛇にぃかまれたら、あのいけぇふりぃ松の木のまわりをまわんねぇ。ほいたら痛みはじき、のぉなるし毒もぉ消えっさけんて」って教えてうんだったんやと。
ほでから、ちぇえ蛇はたちまち、いけぇ大蛇になるちゅうと松の木から天へのぼっていったんやと。
あっ時、毒蛇にかまれたもんがいたで、ためしに、
「この松の木のまわりまわってみね」ちゅうてまわらいたんにゃと。ほいたら、あの蛇の言うた通り、痛みもきえ毒ものうなって、じきにようなったんやての。
ほれからっちぃもん、ほの松の木はぁ「毒消しの松」ちわれるようになってほれはほれは評判になったんやと。
ほんで、遠い在所からも、蛇にかまれたちゅうひとがようけとたんねてくるようになったんやとの。
ほやけどのぉ、ほの松の木はぁ昭和二十三年のぉ福井大震災の時にぃ、のうなってしもたんやとの。

その3　松屋のびんつけ

①原話1

出典『越前丸岡の民話と伝説』松屋のびんつけ（谷町
発行・築城四百年記念祭実行委員会
編集・岩崎新之助

一九七五年三月初版・平成四年三月四版

松屋のお絹は、丸岡近郷近在での評判のきりょうのよい娘でした。父も母も目に入れても痛くないかわいがりようです。
或る日のことでした。お絹を連れ立って、長屋橋にさしかかりました。長屋橋の下は、どんよりと青みどりの水がよどみ、川渕に生えている木の影を移して、何とも言えない鬼々迫るものがあります。どこから来たのでしょう。橋のうえに美しい若者が立っているではありませんか。
「もしもし、その美しい娘さんを私の妻にもらえないでしょうか。もし、くださるならば、今日千金得る商いを教えましょう。」と言うのです。両親も娘も、それを聞いて嫁にやる約束をしました。
すると、若者は、
「自分は長屋橋の渕にすむ、大蛇である。」
とうちあけました。しかし、今さらどうすることもできませんでした。両親は、なくなく花嫁のお絹を美しく装おい長屋橋まで送って来ました。
「それではお絹、身体に気をつけるんだよ。」
「お父さん、お母さん、さようなら。」
若者とお絹は、見るも恐ろしい大蛇になって、よどんだ渕に沈んで行きました。両親は、涙を流しながらいつまでも波紋の消えてしまった渕を眺めていました。
さて、大蛇の教えてくれた秘法というのは、びんつけ油の製法で

した。当時の女の人は、日本髪ですから、髪を結うのに是非とも必要なのが、ねばったびんつけ油でした。

「松屋のびんつけ油は、香りがいいよ。」

「松屋のびんつけ油は、ねばりぐあいがとってもいいね。」

「髪が長もちするよ。」

松屋のびんつけ油のことが、口から口へ丸岡ばかりでなく遠くの町や村まで、丸岡の名物として伝わり、買いに来る者が後をたたず、松屋はみるみるうちに大金持ちになったのです。

両親はお絹の供養にと長屋橋のたもとにお地蔵様と石碑を建てました。また、長畝橋、丈競山、浄法寺のろく谷、磯部と森田の地境等に地蔵堂を建て、娘の命日には参拝していました。

ある年のことです。丸岡に大火がありました。あれよあれよという間に火は町中に燃え広がり、松屋も火に包まれてしまいました。その時です。どこからともなく大蛇が二匹現われ、口から水をふき、火を防いだので松屋は焼け残ったということです。

このびんつけは、谷町の戸田丸屋で昭和の初めまで売り出されていたといいますが、女の人の髪形の変化に伴い使用する人もなくなりびんつけはもうありません。

当時の松屋の屋敷は、今は谷町福井銀行丸岡支店が建っています。

原話2[2]

長屋橋の松屋地蔵

「坂井町の伝説と民話」丸岡ロータリークラブ

昔、丸岡に美しい娘を持つ松屋という商人がいた。この娘は丸岡小町と言われる丸岡一番の美人だと町の人からもてはやされていた。ある日、この娘を連れて金津まで商売に行くことになり坂井町の長屋橋の淵にさしかかった。花のように美しい娘の姿が淵の水面にうつり、これにまどわされたのがこの淵に住む大蛇だった。

大蛇は一人の立派な青年に化けて松屋父娘の前に現れた。青年は父親に

「もし娘さんを私の妻にいただけるなら一朝にして大金持ちになれる職業をお教えしましょう」と云った。娘はあまりの美青年の縁談に、うれしくて女心は躍るのであった。娘は一も二もなく承知し、かたくちぎりは早くも結ばれたのである。

吉日を選んで、婚礼の式を挙げた。式後この青年が

「私は長屋橋淵に住む大蛇の化身です」と云った時には父娘はもちろん、親せき一同のおどろきは大変だった。娘は泣きながら青年と一緒に淵に沈んでいった。

松屋が淵の主から教えられたのは、びんつけ（あたまにつける油）のつくり方だった。

とてもよいびんつけだったので、たくさんの女性からよろこばれた。「松屋びんつけ」といってその名は近在にひろまっていった。松屋はおかげで丸岡一の大金持ちになった。

松屋では娘の菩提を弔うために建てたのがこの長屋橋の地蔵である。この地蔵は当時の西長屋村の庄屋五十嵐善右エ門家が今でも正月とお盆にお参りしてお守りしている。

数年がたって、丸岡に大火があった。谷町から出火し、南風におられて火が松屋にせまった時、一匹の大蛇が現れ「水をくれ」と叫んだ。主人が水を与えると大蛇は口から水を吹きだして松屋にかけ、丸岡中が焼けたのに松屋だけが残った。

更に何年かたってまた大火があり、この時も大蛇が二匹現われ、「水をくれ」とさけんだが主人は与えなかった。松屋はたちまち焼失してしまい、焼け跡には二匹の大蛇の無残に焼け死んだ姿があった。松屋はその後すっかり貧乏になり、家屋敷も人手に渡った。現在の福井銀行丸岡支店のある場所が松屋のあとだという。このあと長屋橋の淵には大蛇はいなくなった。

②共通語（標準語）

再話　朽谷洋子（二〇一五年一一月）

昔、丸岡に「松屋」という店がありました。そこにはお絹というそれは、それは美しいと評判の娘がいました。

ある時、松屋の主人は、お絹を連れて、金津へ用足しにでかけました。

ちょうど、坂井町の長屋橋までくると、橋の上にとても立派で美しい若者がひとりたっていました。若者は

「娘さんを、私の嫁にもらえないでしょうか」といいました。その若者が、あんまり、りっぱで、美しかったので、お絹は、すぐに、気に入ってしまいました。松屋の主人も若者が

「娘さんを私の嫁にいただけるのでしたら、これから後松屋が繁盛して、大金持ちになれる方法を教えてさしあげます」といったので、娘を嫁にやることにしました。

そこで松屋のお絹は若者の嫁になりました。

ところが、そのあとで、若者は

「私は、実は長屋橋の渕に住んでる主の大蛇です」とうちあけました。娘も主人もとてもびっくりしましたが、もうどうすることもできません。

若者は

「約束した、松屋が繁盛して大金持ちになる方法をお教えします」と言って、髪を結う時に使うびんつけ油の作り方を松屋の主人に教えました。それから、花嫁のお絹をつれて長屋橋の渕に帰っていきました。ふたりは二匹の大蛇の姿になると、渕に沈んでいきました。松屋では、大蛇が教えてくれたように、びんつけ油をつくって売り出しました。

すると、

「これは、今までのびんつけのように、くさくない。とてもよいにおいがする」

「このびんつけを使うと結った髪がながもちする」と、とても評判になり「松屋のびんつけ」といわれるようになりました。そして、丸岡だけでなく遠いところからもおおぜいの人が買いにくるようになったので、松屋はたちまち大金持ちになりました。

松屋の主人は、長屋橋の渕にしずんだ娘のことが忘れられず、長

屋橋のたもとに地蔵様をたて供養をしたということです。

それから、何年かたったある年、丸岡に大火事がありました。火が松屋のそばまできたとき、どこからか、二匹の大蛇があらわれて「水、水をください」とさけびました。松屋の主人が、水をもってくると大蛇は水をふくんでは松屋にぷうっとふきかけ、ふくんではぷうっふきかけました。それで、松屋はもえずにすみました。

それから、何年もたったある年丸岡で又大火事がありました。松屋のすぐそばまで火がもえてきたとき、どこからか二匹の大蛇があらわれて

「水、水をください」とさけびました。ところが今度は、どうしたわけか、主人は水をもってきませんでした。とうとう、松屋に火が移り丸焼けになってしまいました。やけあとには二匹の大蛇が松屋の建物をまもるようにぐるりと巻き付いて死んでいました。それから長屋橋の渕の主である大蛇はいなくなったということです。

そうらいべったりかっちんこ

③土地ことば（福井弁）

再話　朽谷洋子（二〇一五年一一月・二〇一五年一二月・二〇一六年一一月）

昔のぉ、丸岡にぃ「松屋」っちゅう店があったんやとの。ほこにはお絹っちゅうて、ほれは、ほれはぁ美せぇって評判の娘がいたんやと。

あっ時、松屋のぉだんなはんは、お絹を連れて、金津へ用足しにでかけたんやとの。ちょうど、坂井町の長屋橋までくるっちゅうと、橋の上にひどもに立派で美せぇ若者がひとりたってたんやとの。若者は

「娘さんを、うらのぉ嫁さんにもらえませんやろか」ちぃたんやぁと。ほのぉ若者が、あんまし、りっぱぁで、美せぇかったもんやさけんて、お絹は、いっぺんに、気に入ってもたんやとの。松屋のだんなはんも若者が、

「娘さんをうらのぉ嫁さんにいただけるんやったら、松屋がぁ繁盛して、大金持ちにぃなれる方法を教えてさしあげます」ちゅうたさけんて、娘をぉ嫁にやることにしたんやぁと。

ほんで松屋のお絹は若者の嫁さんになったんやとの。

ほいたところが、ほのあとで、若者は、

「うらはぁ、実は長屋橋の渕に住んでる主の大蛇なんや」ってうちあけたんやと。娘もだんなはんもひどもにびっくらこいたんやけどた、もうどうしることもできん。

若者は

「約束したぁ、松屋が繁盛して大金持ちになる方法や」っちゅうて、髪を結う時に使うびんつけ油の作り方を松屋のだんなはんにおっしぇたんやぁと。ほでから、嫁さんになったお絹をつれて長屋橋の渕に帰っていったんやとの。ふたりはぁ二匹の大蛇のなりになるちゅうと、渕に沈んでいったんやといの。

松屋では、大蛇がおっしえてんだったように、びんつけ油をこっ

しぇて売り出したんやとの。ほいたら、

「これはぁ、今までのびんつけんてね、くそねぇわ」

「このびんつけけはぁ、ひどもに、いいかざがぁしるわ」

「このぉびんつけを使うっちゅうと髪がぁながもちしるんやって」

ちゅうて、ひどもに評判になって「松屋のびんつけ」っていわれるようになったんやといの。ほんで、丸岡だけでなく遠いとっからもぉみんなが買いにくるよねなったさけ、松屋はぁ、たちまち大金持ちになったんやと。

松屋のだんなはんは、長屋橋の渕にしずんだ娘のことが忘れられんで、長屋橋のたもとに地蔵様をたて供養したんやと。

ほれから、何年かたったある年、丸岡に大火事があったんやと。火が松屋のそばまできたとき、どっかからか、二匹の大蛇があらわれて

「水、水んで」てさけんだんやとの。松屋のだんなはんが、水をもってくると大蛇は水をふくんでは松屋にぷうっかけ、ふくんではぷうっふきかけたんやと。ほんで、松屋はもえんとすんだんやとの。ほでから、何年もたったある年丸岡で又大火事があったんやといの。松屋のすぐそばまで火がもえてきたとき、どっかからか二匹の大蛇があらわれて

「水、水んで」とさけんだんやと。ほいたところがこんだは、どうしたんかだんなはんは水をもってこんかったんやっていの。ほんで、松屋は丸焼けになってもたんやと。やけあとには二匹の大蛇が松屋の建物をまもるようねぐるりと巻き付いて死んでたんやと。ほでから長屋橋の主の大蛇はえんようになったというこっちゃ。

そうらいべったりかっちんこ

註

(1) 小澤俊夫(おざわ・としお)。小澤昔ばなし研究所所長、筑波大学名誉教授、一九九二年より全国各地で「昔ばなし大学」を主宰。季刊誌「子どもと昔話」を刊行。二〇〇七年ヨーロッパ・メルヒェン賞受賞。

(2) 松屋のお絹に関する話は松屋は丸岡町であり、長屋橋は坂井町のため、両町に伝説としてのこっている。放映されたときは丸岡町「松屋のびんつけ」坂井町「長屋橋の大蛇」とわけていたが、その後そのふたつをまとめてひとつにした。